

活動報告

2019.5.1 記 西脇英夫

多門院、多福寺と三富新田 一温故知新の散策一

実施日：2019年5月1日（水） 9:00~13:30

参加者：21名

5月1日朝、航空公園駅前の多門院行バス停に令和元年初日の明るい顔が並びました。夜来の雨も上がり爽やかな新緑の中、人混みと食べ物屋台のにおいの漂う多門院、毘沙門天、神明社で満開をやや過ぎた牡丹の花、くまがい草を愛で、さつまいものお飾りをさすり、厄除けの寅に祈願のあと、徒歩20分で、320年の昔から住民の信仰の拠りどころであった多福寺へ。

閑静な木立の中、鐘楼、十六羅漢が安置されているという山門を仰ぎました。釣鐘の説明で、川越藩主・柳沢吉保の家老で三富新田開発最大の功労者・曾部権大夫（そべごんたいふ）の住民の安心立命を願う1696年の銘文が刻まれていると知り、わが意を得たりの感がしました。彼の誠実な人柄は、「赤い風」で歴史小説家・梶よう子が筆致を尽くしているところです。この銅鐘が、どうして戦時中の金属供出を免れ、埼玉県指定文化財として今に残り得たのかなと埋め隠した跡をキョロキョロ。

四阿で持参の弁当で昼食。記念撮影のあと、六間道（ろっけんみち、類焼を防ぐため幅員は10.8m（通称：いも街道））沿いにある開拓名主の島田家を外観し、行程の最後に三富のひとつ上富（かみとめ）新田を散策しました。風よけの茶樹で区画された一軒当たりの面積は5町歩（675m×72m）の短冊状の畑は、ジャガイモ、大根、さといも、さつまいも、人参などの露地根菜生産で首都圏唯一の農業遺産認定地として知られており、一目でそれとわかる肥沃な土壌でその先には、腐葉土を産む貴重な平地林が現存していました。

残念だったのは、22mの深井戸跡を見つけることができなかったことです。私は、平地林の泥道でスッテンコロリ。一層のよちよち歩きとなって一行から遅れてしまいました。

その後、多門院での説教浄瑠璃で小栗判官と照手姫の復活に涙された方もいらしたようです。

私が、膝と腰をさすりながら帰宅したのは小雨が降り始めた15時過ぎ。折しも、ラジオは“ありがとう平成”“ようこそ令和”の番組中で平成上皇のおことば『（戦争の）歴史に学ぶことの重要性』を紹介していました。

私たち21名（うち4名は途中でお帰り）も、元禄時代に近隣との紛争の荒野を一変、地割開拓し、屋敷地、耕地、平地林の循環型農地とした先人の労苦と知恵を学んだ一日でした。

以下に拙詩を。

「三富新田」 七言律詩 (ゴチックは押韻 支) 蒼風 西脇英夫

村境秣場諍訴期 村境の 秣場 (まぐさば) 諍訴 (そうそ) の期 (とき)

藩君開墾武州涯 藩君 開墾 (かいこん) す 武州 (ぶしゅう) の涯 (あたり)

赤風捲土瘦荒野 赤風 土を捲 (ま) く 瘦 (や) せたる荒野 (こうや)

水利無便作物萎 水利 便無 (びんな) く 作物萎 (か) れる

掘削井深流水至 井 (せい) 深 (ふか) きを掘削 (くっさく) 流水に至 (いた) り

植林平地沃田資 平地に植林 (しょくりん) 沃田 (よくでん) に資 (し) する

空残草樹一苔墓 草樹 空 (むな) しく残 (のこ) す 一苔 (いちたい) の墓 (はか)

今見整然三富姿 今見る 整然 (せいぜん) 三富 (さんとめ) の姿 (すがた)

担当 A グループ 西脇英夫 安田好子 池田 衛 高橋佐和子

田沼幹子 田口 靖 寺脇 隆 恩田正子

多聞院のぼたんと“寅まつり”の毘沙門天福寺と三富新田の散策写真



多聞院・毘沙門堂



六地藏・ぼたんの花園



神明社



神明社奉祝幟



多福寺山門



木ノ宮地藏奥の院の石地藏



開拓名主島田家



木ノ宮地藏堂

